

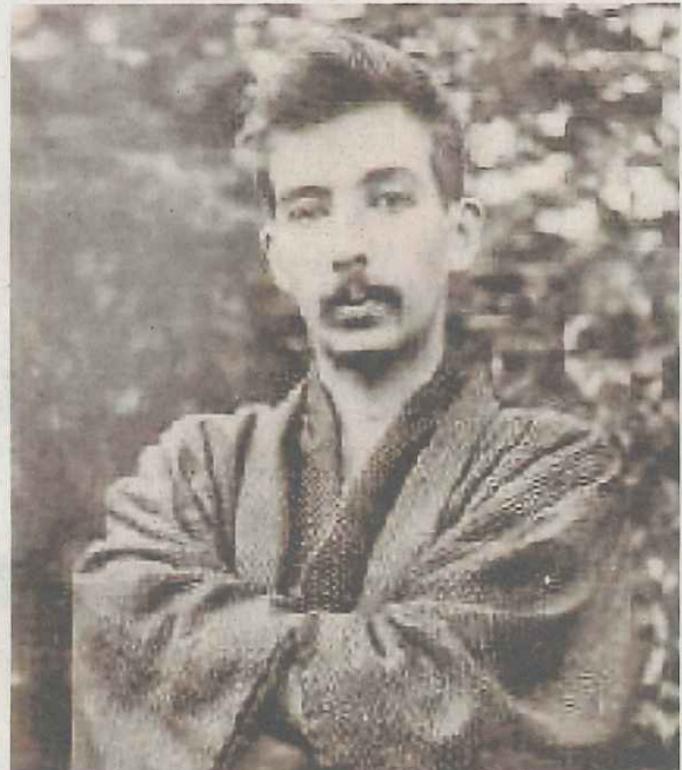
ながさき異聞

ブライアン・バークガフニ

(57)

大泉黒石をしのぶ

大泉黒石（1893～1957年）



高札が撤廃されたのと同じ年である。

居留地時代にも多くの混血児が生まれた。外国人親族の名前と国籍をとり、やがて日本を離れるケースがあつた一方、トマス・グラバーの息子倉場富三郎やロバート・N・ウォーカー船長の次男ロバート・ウォーカー二世のように、長崎に残つて地域の発展に貢献した人もいた。また、江戸期同様、外国人の父親に無視され、日本人として育てられることも珍しくなかつた。

明治26（1893）年、長崎市八幡町で日本人女性とロシア人男性との間に生まれた大泉黒石（本名・清）は後者の一人である。彼は、父親不在のまま波乱に満ちた少年時代を過ごしたが、大正8

（1919）年、中央公論誌に小説「俺の自叙伝」を連載すると、一躍、全国的な脚光を浴びることとなつた。その後、彼は「老子」や「人間廢業」など次々とベストセラーを世に送り、名作「おらん dashed」や「黄（ウォン）夫人の手」などには、長崎の情景について精彩に富んだ描写を残した。しかし、その栄光も長くは続かず、昭和10年代の日本を取り巻く不寛容で排他的な情勢の中で苦難に直面した。

大泉黒石が残した次の一句には、暗い時代の中でも、彼が決して失わなかつた自負心と長崎工スプリングがひしひしと伝わる。「嫌はれて花になりけり野芹かな」である。（長崎総合科学大教授）